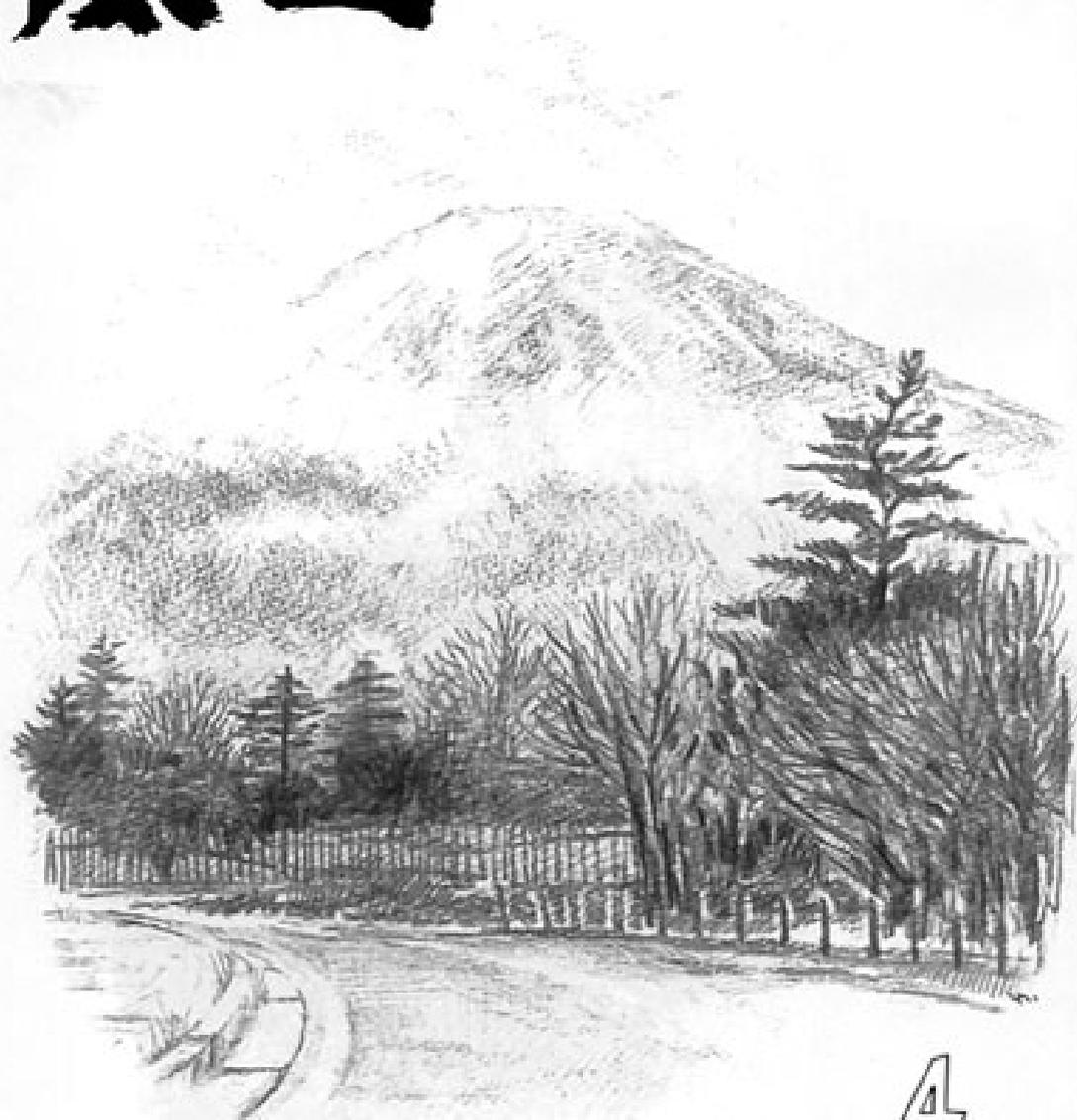


平成24年4月5日発行(毎月5日1回発行)  
第52巻4月号(通巻632号)

# 風土



4

田螺鳴く

神蔵

器

吐く息に三月生まる真澄かな

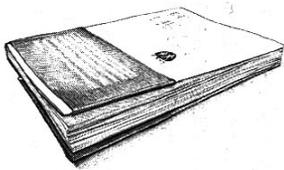
銀次逝く三月三日のかがやきに

よはひのみ十三越えて西行忌

陽炎に杖をとられし行方かな

寺の子の雲にあそべる仏生会

酒とるか命をとるか田螺鳴く  
如月やもの言はざれば目の乾く  
明史恋ふ冬のわらびと瓢の笛  
大寒や硯の海の波静か  
寒牡丹平氏の池より源氏池  
凍星を源流にして大河かな  
深呼吸して凍蝶の粉微塵



# 竹間集

同人作品



寒鰯

小林清之介

初場所や投げてにやりの把瑠都よし  
旧元日福恵女史より寒鰯来  
鰯の味噌漬ずしりと重し有難し  
寒鰯美味しかの天国の明史氏よ  
おぞましや雪に転倒入れ歯折る  
入れ歯欠き無念や年の豆喰へず  
二種類の鰯を左右に書庫の端

冬三つ星

小野寺節子

建築の音に大工に日脚伸ぶ  
寒林に学童の声何学ぶ  
雪雲の起伏くまなき空模様  
風花や通勤女性の前髪に  
雑木山春遠からじ風の声  
山ふところの畑に足あと春隣  
乱世に冬三つ星のたたずまひ

大寒

田村すゝむ

生きて又恥を書き足す新日記  
人日やドアに噛まるる不在票  
雪載せて長距離トラック上京す  
侘助の花に屈めば海の音  
いづれ行く道にも見えて冬木の芽  
寒に入る机ひとつが我が砦  
大寒や水の器に水満たす

人日の  
瀬戸  
悠

人日のナウマン象の白歯かな  
食積の蒟蒻ばかりへつてをり  
寒夕焼硝子のビルが声を上ぐ  
百ヶ日霜降る墓となつてをり  
水平な鷹の翼が風を切る  
十幹の竹の切口日脚伸ぶ  
引く波の曲線美しき実朝忌

大寒波  
塩田  
博久

大寒波山から小僧がとんで来る  
ただなはる等圧線や寒波来る  
街路樹に梢の仔細寒波来る  
寒波来る電線空に張りつめて  
大寒波庭の錆色極まれる  
男にも保湿クリーム寒波来る  
門ごとに春聯紅く寒波来る

冬たんぽぽ  
代田  
青鳥

窓拭きて如月の陽を溢れさす  
ウインドウに猫の湯湯婆街晴れて  
大根めし今日一日は気負はずに  
兄嫁も兄も童顔福詣  
『自分の始末』てふ本買ってだいこ煮て  
昔牛馬の通りし径や冬たんぽぽ  
水疾き水車の村や冬たんぽぽ

初春の若狭  
田中佐知子

一条の初日透けたる勅使門  
初春の雪踏む若狭一の宮  
正月の日差しに弾け海桐の実  
赤松の幹に日の差す初湯かな  
皮剥の大漁日なり残り福  
酒盛りの硝子の曇る鯉起し  
缶焚火薪投げ込んで出漁す

闇は火を

—山路 紀子—

闇は火を火は水を恋ひ修二会果つ  
春北風や紙の白衣の練行衆  
水取や濁世を隔つ竹矢来  
階ぬらしつつ若狭井のお香水  
先導は若き山伏お水取  
法螺貝や如月の風震はせて  
二月堂修二月会の樂流れ  
道なりに露地行灯や孕鹿  
老杉に星の華咲く春の夜  
朧月若草山にあがりけり

# 山河集

同人作品



神蔵器選

三輪山を転がつて来る淑気かな  
読初に跳ねる「因幡の白うさぎ」  
獅子がしら木枯抜ける鼻の穴  
病床に日数といふもの冬桜  
寒満月消すすべもなき黄泉路かな

雨宮 桂子

福寿草五人家族の三つ咲く  
田の神も来て左義長の炎が猛り  
枯山の幹まで濡れて青々忌  
冬の雷古事記の夜もかく鳴るや  
冬ざれてをり率川の舟地蔵

上辻 蒼人

尼寺の葵の御紋風花す  
冬萌や如来半歩を踏み出され  
参道や白万両の零れなき

内藤 静

足利のやぐら牡丹の冬芽立つ  
初風や注連もて結ぶ岩ふたつ

石井 秀一

文字少し乱れて姉の初便り  
炉の炭の爆ぜある音も淑気かな  
旅行案内ずしりと届く七日かな  
枯木立瞼の裏も日の差して  
寒風や傷なく空を拭ひさり

開山 尼讚 ふ 碑 竜 の 玉 落 碁 緞 袷

寒椿文士の墓所にペン・ノート  
雪晴れて雪より白き鷺の立つ  
淑気満つさねさし相模一の宮  
水仙や一本挿して見ゆること

◇特別作品◇(抄)

## 津の国

浅田 光代

春待つやふくらみきつて樹のしづく  
鯉の口四温のひかり吸うてをり  
片寄せてあり追儼会の鬼の足  
北面に追儼の鬼の打合せ  
すぐ掃かれ狂言堂の鬼の豆  
春風にひらきて摂津名所図会  
箒目の迂回してゐるふきのたう  
寄生木をまづ芽吹かせて大櫓  
津の国の葦に火のつく二月かな  
焰得て葦ゆつくりと前のめり

# 風土独語／神蔵 器



三輪山を転がつて来る淑気かな

雨宮 桂子

一山の雪漕ぎ雪に供華を差す

石崎 淨

この句を見たとき、直ぐに思い出したのは阿波野青歌の代表作  
月の山大國主命かな

であった。自註によればこの夜はあいにくの雨であったそうだが「いつか空もようが晴間を見せはじめたので、参道の反橋―国鉄奈良線に跨がる橋で撤去されて今は無い―まで下れば月が出ているかもしれないといわれて出てみた。はたして玉のような月がかがやいて現れた。思わず力づよい合掌と拍手」とある。

三輪山の大神神社は大和一宮として大和地方の信仰の中心、祭神は大物主神ということだが、この神社には拜殿があつて本殿がないことで知られている。つまり三輪山全体、そのものがご神体なのである。青歌は同じ自註で三輪山を大國主命の御神体とあがめている、とある。大物主神と大國主命の関係がどうあろうと、この句は大國主命でなければ成立しない。

淑気は季語に定着して俳句の世界では、かなり重要な季語になって来た。作者は美しい三輪山、神代の歌枕、「三輪山伝説」などに惹かれ、且つ青歌の句に導かれてか、新年のはじめに三輪山に参拝を志したようだ。

三輪山は標高四六七メートル、全山が古松におおわれている。

一步一步進むと、全山にみなぎる淑気、清浄な靈気がひしひしと身にも心にも迫り、神につつまれて行く。「転がつて来る」は山全体の淑気が四方から作者一人に集まってくる感動であろう。それは青歌の句の大國主命が、まことに大胆に、小手を弄することなく、感動がそのまま一句になっていると同じである。

この一山は盛岡五山の一つ、臨濟宗の寺東禅寺である。寺の裏山には南部家数代の藩主の墓がある。また、この寺には山口青邨先生とイソ子奥様の墓が建っている。寺の裏山、杉木立の中を百二、三十メートルくらい登ったぼっかり明るい場所に山口家ご本家と先生の御両親の墓とが並び、その一番左が先生ご夫妻の墓になっている。

東禅寺のご住職は作者浄さんの実兄（昨年八十四歳で遷化された）で、第二十四世ということである。

盛岡は北国、豪雪とまでゆかないかも知れないが、今年の雪は特に多く私たちの想像を超えるものであろう。久し振りに東禅寺を訪れた浄さんは、お兄さんや青邨先生をはじめ幾人も是非お参りしたい人も多かろう。山の傾斜は高くなるほど急勾配で厳しく雪も多い。手に持った供華と何軒分もの線香、雪に備えて完全武装はしているであろうが歩くというより這つて舟を漕ぎようにして必死に登つてゆく。ようやくたどり着いた目的の墓も深い雪の中、僅かに墓の正面の雪を払って、雪の中に供華を供え、線香を立てる。

束のまま雪に立てる線香は、澄みきったあたりに芳香を放ち、青白くうすい紫の煙が天へ消えて行つた。その時、杉の高い梢の雪がばらばらと降つて来た。（以下略）

# 風土集



# 神蔵器選

歳晩や辻井伸行聴きながら 五條 上辻蒼人

初山河いつもの位置に正座して

若菜摘む万葉人の詠みし野の

初葉師土鈴の音色振り較べ

左義長の振る舞ひの酒竹筒で

癌連れて師走の街を帰りけり

竜の玉墓は生者のために建つ

幾何学は夜空に生まれ冬星座

風花や走者はゴールのみ見つめ

座礁船時間を止めて冬の海

読初は竜攘虎搏の史記列伝

今昔物語の怪しはをんな冬の月

牡丹雪はらふ孔雀の羽根の音

風花す延暦寺への本坂に

赤蠟燭灯す築地の報恩講

川崎

豎山道助

相模原

岡本尚子

どの窓も初日ひとしく小児棟 平塚 中沢三省

風花や島に伝はる能舞台

白鳥の海に漂ふ実朝忌

ひたぶるに耐へて色増す雪椿

食積を遺影の前に供へ置く

端座して墨の香を聞く寒の入り

過去帳の新戒名に菜粥かな

青鷺の背に立春の光かな

春の雪花見小路に若き僧

「和顔愛語」五合庵に降る春の雪

朝市の冷えし釣銭貰ひけり

現し世はちぎり絵のごと牡丹雪

被災地を憚り通る余寒かな

春立つやグリムの表紙うすみどり

やはらかき光透かして春障子

京都

杉本葉子

秋田

本間羊山